

幼児の自主性に関する一考察(1)

— 3 歳児に見られる その芽生え —

○山田 麻紀 安諸 千波 小林 あや 永井 理恵子
(慶松幼稚園) (同) (同) (日本学術振興会特別研究員)

【はじめに】

平成9年度、我々の幼稚園では、4月の年度始め当初より、園児の全体的な自主性の芽生えとその確立のありかたに問題が見られ、その援助のための手立てを検討しつつ保育を進めてきた。本発表は、この一年間の本幼稚園児の問題状況と、それに対する保育者の援助の過程とを綴った研究記録である。

本研究における「幼児の自主性の芽生えと確立」という主題は年少・年長を問わず一貫しているが、具体的な研究は年少児(3年保育児)・年長児のそれぞれの自主性の成長発達の段階に合わせたアプローチの手法をとっておこなってきた。そこで本発表では、両学年に共通した「研究の目的」を初めに提示したうえで、

年少児の研究を(1)、年長児の研究を(2)とし、別個の「考察」をおこなった後、両者を合わせた「総括」を提示していくことにしたい。

なお、本論文集原稿提出時には、まだ第3学期が未終了であるため、一年間の研究の最終的な考察は大会当日に掲示するポスターに記載する。その他、本研究をおこなうに当たって使用したところの、幼児の姿を撮影した写真も、ポスター上にて提示したい。

【研究の目的】

「自主性」とはさまざまな定義があるが、人間が自ら感じ思ったことを、他者の評価にとらわれることなく表現することのできる能力を意味するものと考えることができる。そしてこれは、他者を排して生きるということではなく、また他者との関わりなくして芽生え、確立するものではない。「表現すること」とはすなわち、表現したいという想いをもつ自己と、それを受容する他者の存在が必要不可欠であり、自分自身への信頼感と、自己をとりまく他者への信頼感の双方なくしては成立し得ないであろう。よって、この「表現すること」がその具体的行動として確認される「自主性」の確立は、他者との関わりのあるかたによって導き出されると考えられるのである。

本研究は以上の視点から、幼児の「自主性」の確立における他者の果たす役割に特に着目し、その望ましい援助のありかたを考究することを目的とするものである。

【研究の方法】

本発表における「幼児の自主性」の研究は、「目的」に示したように、他者との関わりに特に注目しておこなうことにした。幼児期に幼児が関わる他者として、自我の芽生え期である年少児を対象とした発表(1)では、主に母親に注目し、人間関係が拡大し社会性の充実を目指す時期である年長児を対象とした発表(2)では、仲間関係に注目して研究をおこなった。そこで発表(1)では、ある一人の幼児を対象とし、その幼児と母親との母子関係を追究した。一方の発表(2)では、集団保育活動場面における幼児たちの、集団内における個の確立の姿を追究した。

研究の具体的方法については、各学年の幼児の姿を保育者が定期的に記録をとると共に、ビデオ・写真撮影をした幼児の姿を保育者集団で検討し、具体的な活動場面での幼児の自主性の芽生えと確立の様子を確認し合い、保育場面における援助の方向を探った。考察の結果は、その後の母親への援助や保育方法に生かした。以下の考察では、(1)(2)それぞれにおいて、各学年毎の一年間の過程を描いていく。そして最終的に、両者を総合的にまとめ、幼稚園在園期全体をとおして、幼児の自主性の芽生えと確立の援助をどのように進めていくことが望まれるのかを考える。

【考 察—年少児—】

〔1学期の幼児の全体的傾向と、保育援助〕

平成9年度の年少児は、例年になく保育者への依存の傾向が強く、常に保育者が身近にあり、自分自身を見てくれている状態でないと不安感が絶えない幼児が多く見られた。そのために保育者は個々の幼児への対応に迫られ、幼児集団に対する保育を実践することが困難な状況が、1学期一杯に互って続いた。

年少児担当の保育者集団は、このような9年度年少児の状況をもたらした要因について検討し、保育の方向性を探索した。すなわち、このような幼児の背景には、家庭の家族、特に母親の養育態度が孕む問題点が幾つか特徴づけられた。ひとつの傾向としては、核家族化の進む家庭で母親が子育てのおこないかたに関して育児書からの情報がその主な情報獲得手段となり、幼児の実際の姿に対する柔軟な対応ができないと共に、

常に高い理想を求める結果として現段階での幼児の育ちのありのままを認めることができないという姿が見られる。また別の傾向としては、母親の幼児に対する成長期待が非常に大きく、それになかなか達しない幼児に対して過剰な働きかけを集中的におこなっているという姿も見られる。いずれにせよ、母親の子育て意識に全く余裕がなく、少しでも各種の教育を先取りし、我が子が他の子どもと比較して一歩でも先に進んでいる状況にあることを強く求めている傾向が見られる。そのために、幼児を幼稚園という社会集団生活に入れることによって初めて達成が可能となる、他者との関わりの中で個を育てていくことの役割とその重要性を十分に理解していない。ゆえに幼稚園教育に対しても、我が子が保育者から何を「教えて」もらえるか、或いは我が子が保育者にどれだけ特別な手厚いケアをしてもらえるかということが最大の関心事になっており、同年齢集団のもつ教育力の重要性を全く理解していないという傾向が見られると判断された。

このような状況の中で保育者は、幼児に対しては、一人ひとりの幼児の要求に応じて幼児の不安感を少しでも軽減するような個別的言葉かけを多くおこなうと共に、様々な保育環境場面を生かした多様な集団遊びを導入して、遊びの楽しさから不安感を忘れて、仲間存在を徐々に認識できるように配慮した。その一方で母親に対しては、子育ては母親一人の頑張りでしかないものではなく、保育者や仲間集団との関わりの中でおこなわれていくものであるとして幼稚園教育の役割を改めて認識させると共に、我が子に対する発達段階を超えた、或いは現在の子どものありのままの育ちを無視した期待を抱かず、まずは今の子どもの育ちを認めてやるようにとの助言を、懇談会や個別面談の場面で伝達した。

〔個別的状況－1学期〕

前記のような全体的傾向の中から、ある一人の女児の育ちを特記したい。

この女児の家庭は自営業であり、両親、祖父母、弟の3世代家族で、多くの年長者に囲まれて成長してきた。また自宅の近所には、いずれも本幼稚園卒園児の年長従兄が6名、女児の家庭と同業の親戚家族と共に住んでおり、従兄はみな各種表現活動に優れた能力をもっていたため、家庭生活においてこの女児に対する干渉的な言葉かけが総体的に多い成育環境にある。また、両親始め家族全員が、女児の少ない一族の中でこの女児に対しての期待感が大きく、この女児の発達の現実よりも過大な評価をしている。特にそれが顕著な

のが母親で、入園当初から女児に、園で頑張って活動に参加してくるように言い含めて登園させていた。

女児の園での姿は、登園への恐怖感が非常に強く、園に来て緊張が解けず、大音量での泣きが連日見られた。自由遊び時間中は無論のこと、一斉保育活動は全て拒否し取り組もうとしない。仲間と遊ぶこともなく、在園中は常に帰宅欲求と不安感に苛まれ、園生活を楽しむ姿は全く見られなかった。

保育者はその要因として、女児の心身の発達段階を超えた母親の期待が、女児に圧力をかけていることを想定した。そこで女児に対しては、幼稚園は頑張るところでも、評価を受けるところでもなく、自由に楽しく自己を表現して遊べる場所であることを、毎日の言葉かけや遊び場面への誘いをとおして知らせていくようにしたと共に、母親に対しては、不相応な期待を女児にかけることなく、本人が自分らしく自己表現できるような子育ての実行を助言した。

〔個別的状況－2学期〕

長期休暇後の9月、女児は保育者から離れていられるようになったのに加え、園でも笑顔が見られ、保育者が居なくても他の幼児と遊ぶ姿が時折見られるようになっていた。この大きな変化は、母親が夏期休暇中、

この女児自身の楽しい遊びを充実させるようにし過干渉を控えたと共に、園でも楽しく過ごしてくることを第一に登園させることを心がけたことによると見られた。併せて園でも、自由遊びの場面では、時折仲良くしてくれる友人が出現したことや、一斉活動の中で本人が園での活動の中に楽しみを見いだせるようになってきたことが有意義であったと見られた。

10月上旬におこなわれた運動会に向けた活動にも、仲間と共に積極的に参加している姿が見られた。集団でおこない、且つ解放的な行事である運動会活動は、この女児に、楽しい園生活を経験させる良い機会であったものと考えられた。

しかしその後、2学期後期において、この女児の状態は再び1学期に戻っている。11月末の作品展に向けての各種製作活動は、3年保育では個人製作中心であり、その成果が個人的に期待されるために、再び女児の負担となってしまったものと思われる。母親は、女児の登園拒否も完全に収まり園生活を楽しめるようになったのに安心し、また以前の子育て態度に戻ってしまった。この女児が家庭において、よい作品の出来栄を期待されていることを敏感に察知したといえる。

2学期末段階で出現している登園拒否と退行現象を、3学期活動をとおして減少させていきたい。